

# 地域と共に歩む道総研

第2回

## 北海道農業のさらなる発展を目指して

北海道立総合研究機構農業研究本部は、北海道の基幹産業である「農業」の二層の振興のため、道内の各地域に適した作物や栽培技術の開発、家畜の育成や飼養技術の開発、食の安全やバイオテクノロジーに関する研究、地域課題解決支援を行っています。

### 農業研究本部の概要

農業研究本部を構成する各農業試験場の歴史は、明治時代にさかのぼります。明治2（1869）年に北海道開拓使が置かれ、欧米農法の導入が進められました。その後、より高度な北海道農法の確立を目指して、明治34（1901）年、札幌に北海道農事試験場が設置され、北海道に適応する農業試験研究が本格的にスタートしました。明治43（1910）年には、本場と4支場からなる全道的な研究機関となり、その後いくつかの組織改編を経て、現在は8試験場1支場となっています。北海道は東西南北に大きな広がり

を持つため、地域ごとに特色ある農業が展開されています。地域特性に合わせた技術開発を進めるため、道央、道北、道南、道東、オホーツクの各圏域に中央（長沼町）、上川（比布町）、道南（北斗市）、十勝（芽室町）、北見（訓子府町）の5つの農業試験場を配置しています。さらに、酪農や畜産、園芸分野については、専門性を活かすため、酪農試験場（中標津町）、畜産試験場（新得町）、花・野菜技術センター（滝川市）を配置しています。各試験場では、大学や民間研究機関と連携した研究開発を進めるとともに、道庁と各地域の総合振興局・振興局、農業改良普及センター、市町村、農業

団体と連携した地域課題の解決支援などの取組も行っています。

本連載第1回に掲載した道総研理事長のコラムにもありましたが、道総研が本年度からスタートした新たな取組である「チャレンジプロジェクト・道産コーンウイスキープロジェクト」で、農業研究本部は、コーンウイスキー製造に必要な農産物原料のトウモロコシや大麦などの生産面での対応を担っています。

### 主な研究成果と農業への貢献

競争力の高い品種の開発や、低コスト、省力栽培、クリーン農業技術などの試験研究に取り組み、これまでに多くの研究成果をあげてきまし



古原 洋  
(こはら ひろし)

### Profile

地方独立行政法人  
北海道立総合研究機構  
農業研究本部長  
昭和38年北海道生まれ。北海道大学農学部卒。平成24年農業研究本部企画課長、27年中央農業試験場作物開発部長、30年本部・研究企画部長を経て、令和3年から現職。農業の調査研究に関わる企画の他、水産、森林、産業技術、環境、建築についても研究の企画、コーディネートを担当してきた。



写真1 道総研が開発した北海道を代表する水稲品種「ななつぼし」と「ゆめぴりか」

いしきは、北海道米ブランドのエキスとして高い評価を得ています。平成18年（2006）年に北見農業試験場が開発した小麦の「きたほなみ」II写真2は、北海道産小麦の収量と品質を高めることに貢献しました。ゆでうどんの色がきれいで食感も優れ、国内はもとより海外産と比べても最高級とされています。現在ではうどん以外にも、菓子など広い用途で加工利用が進んでいます。このほか、大豆や小豆、金時豆などでは高品質な北海道ブランドを支える品種が開発され、中でも道産小豆の主力品種である「エリモシヨウズ」に病害の抵抗性をつけた新品種「エリモ167」や、道産の主力大

豆品種「ユキホマレ」より良質な豆腐ができ、耐冷性が強い「とよみずき」などを十勝農業試験場が開発しました。また、家畜の改良にも取り組んでおり、畜産試験場が開発した黒毛和種の種雄牛である「勝早桜5」は、道産和牛の地位向上にも高く貢献しています。栽培技術においては、北海道の特徴を活かした技術開発を行っています。冬の厳しい北海道でも野菜の生産を可能とした「無加温パイプハウスを用いた野菜の周年生産技術」II写真3・4は、地域ごとに必要なハウスの保温設備と耐雪強度を提示し、葉根菜類の耐寒性から無加温で栽培できる品目や技術を示しました。冬季の寒さが



写真3 雪に覆われた冬の無加温ハウス



写真4 無加温ハウス内での栽培の様子

た。冬季の寒さが

### 魅力ある北海道農業のために

近年の気象変動の影響で、道内では寒暖の差が激しくなり、農畜産物の生産が不安定になることに対する懸念が生じています。農業研究本部は、このような気象変動に耐えることができる品種の開発や栽培技術などの研究開発を重点的に進めています。一方、温暖化の影響は、負の側面ばかりではなく、これまででは困難

だった醸造用ブドウの栽培やワイン産地化など、新たな作物や産業が発展する可能性も出てきました。さらに、持続可能な北海道農業を実現するためには、生産者が自らを誇りに思える新しい農業の実現に向けた環境づくりが大切です。一般的なサラリーマンと比べて、収入が不安定であり、労働時間が長い現在の農業は、担い手となる若者にとって、なかなか魅力的とは感じられないかもしれません。収入がある程度安定し、余暇が楽しめるような農業の姿とともに、農業者の新たなライフスタイルを創造することも農業研究本部の役割であると考え、今後さまざまな研究と課題に取り組んでいきたいと考えています。



写真2 道総研が開発した北海道を代表する小麦品種「きたほなみ」の製品

厳しい北海道でも暖房を使用せず、パイプハウスで年中切れ目なく、野菜の栽培が可能となります。道内各地域や市町村との連携、課題対応のため、道の各総合振興局・振興局や農業改良